

町民文芸



只見短歌会

令和八年九月詠草

退院を見送りくれし介護士の名前は同じ吾娘と重なり
目黒 富子

やうやくに物整理にと忙しめど思ひ出写真便より手が止み
関谷登美子

秋風にとんぼの群れの飛び交ふを追ひてはころぶ息子の顔よ
立花 奏音

一歳の弟靴を下駄箱に仕舞ふ姿を見し兄泣けり
新国由紀子

あはれなりただの噂を得意げに確かめもせず話す輩よ
渡部ヨリ子
やから

只見俳句会

九月定例会

荒庭の隙間より見る花茗荷
帰省子のリンスの香り始末風呂
味代子

手作りパン膨らまず俄か雨
二人いて葱の隣にバラの花
真理子

秋空に風をすい込む猫の恋
秋ふかし寝つけぬ夜に二句三句
睦子

夕刻に斑猫走る神の路
クレヨンに染まる指先盆の月
尚 幸

花火見て風の盆も終わりけり
真夏日も少して終わる夏でした
理恵子

障子張る母の過ごせし明かり窓
秋簾一つ巻きあげ景入るる
恒 夫

朝刊を広げる母や葉月百寿
愁いたる友と見上げし月さやか
一 恵

鎌先の朝露光り草を刈る
秋高しシャツのサイズに迷う朝
修 一

秋寂し無任の寺に鐘一つ
囲炉裏端昔を語る秋の夜
信

今日も又部活動しむ九月かな
秋暑しペタとはりつく四年生
都

